

「幼稚園って何するところ?! 幼児期って何が大切なんだろう」

(243号 1996.8)

ある公立幼稚園での一コマ。降園後の園庭で、「おばちゃん、今日〇〇ちゃんちに、遊びに行ってもいい？」「あら、ごめんね。今日、〇〇ちゃん英語なの。そう言わなかった？だから明日にしてくれる？」「明日、私スイミングだからダメ。」いろいろともめていたが、結局遊ぶ約束は、また今度ということで落ち着いた。

公立の幼稚園は割と保育時間が短い。だが降園後の子どもたちは、けっこう忙しそうだ。おけいごごとの種類を聞いても、サッカー、習字、ピアノ、英語、バイオリン、ラグビー、体操などさまざま。もちろん2つ3つなどを掛け持つことも普通だからなかなか友達と遊ぶ約束ができないのである。(家が市内といえ、離れてる場合は親の送り迎えがないと、遊びに行けないので尚更である。)

私立の場合はどうなるかという、延長保育があり、保育時間が長くなる。また前述のおけいごごとは、幼稚園が仲介となり、専門の先生を園に呼び、希望者にはレッスンするということが多い。幼稚園に対する世間(保護者)のニーズは子どもが小学校へ行っても困らないようにということ…。そこには、もちろん友達関係など集団生活の基本を経験させたいという思いも含まれてはいるが、年々その願いは学習面へと傾いている。そして、子どもを幼稚園に預けて安心したい。時間を自由に使えるし、躰なんかも全て幼稚園に任せたいという欲求が見て取れる。幼稚園は小学校の予備校ではない。小学校に行ったとき困らないようにと文字や計算をやっきになって教えるところではない。もっと大切なものを経験する場所なのだ。

また、子どもは興味あることに目を輝かす。興味がわかれば、大人が黙っていても自然にいろいろな努力をするものである。興味のないものを無理強いしてもなかなか身につかないばかりか、かえって嫌いにさせてしまう可能性が大である。文字教育についてもそれを感じる。年長組の1学期、個人懇談会で一番多い質問は、「うちの子、あいうえおが全部読めないけど大丈夫ですか。」「公立園ではどこまで文字を教えてくれるんですか」という類のものだ。幼稚園教育要領の「言葉」の留意事項の中に「文字に関する系統的な指導は小学校から行われるものであるので、幼稚園において直接取り上げて使用するのではなく、個々の園児の文字に対する興味や関心、感覚が無理なく養われるようにすること」とある。

幼児期、興味や関心を持つことは、とても大切なことである。ただ一人一人の顔、形が違うように、興味を持つものも、また持つ時期も異なっているのである。「隣の子が4歳でひらがなを全部読み書きができるのに、うちの子は5歳になっても…。」と嘆くことはない。必ず、その子にも興味を持つ時期は来るし、こちらでも文字にふれる努力をすればよいのである。

一人一人の興味や関心に全部合わせて教育するのはもちろん無理である。ただ幼稚園ではできるだけ一人一人の子どもに沿った援助を心掛けている。小学校1年生は、幼稚園風に呼ぶと、6歳児クラスである、幼少の連携が叫ばれる昨今、小学校の先生方に、そういう風に見ていただけたらなあと思う。

確かに、幼児期の成長は早い。まして幼稚園の子とて、「小学校へ行くんだ」「もう1年生なんだ」と、期待と不安で小学校の門をくぐるのである。だが中身は6歳児である。そう考えて授業を組み立てていただけると、幼稚園教諭としては嬉しく思うのである。

最後に一幼稚園の時期に見つけて力は机に向かって身につくものではなく、遊びを通した人間同士のぶつかり合いの中で培われていく力だと思うのである。幼児期に身につけた力は、机に向かってする勉強を支える力であり、集中力、好奇心、自発性、思いやりの心など、人が人間として成長していく上で欠くことのできない大切な要素を築くことであると信じている。